

沖縄の村落移動と風水

小 熊 誠*

沖縄の村落には、日本本土とは異なって、その集落が別の場所から現在の場所に移動してきたという村落移動に関する村落史伝承が各地に残っている。その場所は、集落の周囲にある丘陵部にあり、その近くには村落の神を祀る御嶽があったり、集落の祖先が使ったという古い井戸があり、フルジマと呼ばれている。

フルジマは、現集落の背後にある小高い山あるいは丘陵地にあることが多い。その山には、シマの祖先神あるいは神を祀る御嶽がある。仲松弥秀氏は、その山と集落の関係を「オソイ」と「クサティ」と呼んだ。山は集落を愛護しており、これをクサティと呼び、集落あるいはそこに住む村人は山を腰当て、つまりクサティにしている、そこを頼りにするという人文地理的な発想による沖縄村落の解釈である。この地理的解釈は、風水の原理とつながる部分がある。

琉球王府の公的記録である『球陽』の一七三六年の条には、屋我地島および周辺集落が、王府の主導によって村落移動している記録が見出される。それ以降、『球陽』には、37の村落移動の記録がある。その記録を分類すると、18世紀前半の5例を村落移動前期、18世紀後半の24例を村落移動中期、19世紀の8例を村落移動後期に分けることができる。前期における村落移動の理由は、耕作地の確保を主な目的とする地理的理由が主である。18世紀後半の中期になると、耕地の確保のほかに、風水の善し悪しが村落移動の理由としてあ

げられている。19世紀になると、それが逆転して風水判断が村落移動の主な理由としてあげられるようになる。

この変化は、琉球社会の変化と対応している。つまり、17世紀後半の羽地朝秀の改革では、朝貢貿易による重商政策から幕藩体制に組み込まれる中で重農政策に転換する時期に、田畑の開墾である仕明を奨励する政策において、王府主導で村落移動がおこなわれた。また、17世紀前半の蔡温の改革では、風水の知識や技術を援用した山林政策や村落経営が行われ、村落移動を王府の許可制にして王府主導で行うようにした。それ以降、琉球社会において風水の知識が普及し、農民が王府に願い出て風水見分を行う事例も出てきた。

前述したように、『球陽』に初めて村落移動の記録が出てくるのは1736年で、蔡温の時代である。蔡温は、風水の思想や術を国家経営に応用した。しかし、村落移動前期には、風水を理由とした村落移動の事例はほとんどない。村落移動中期には、地理的理由が示された後に、「風水も甚だ善し」と書かれている事例が多い。風水が悪いから移動する、あるいは移動先の場所は風水が良い、あるいはその両方が記されている事例は、全24例中20であり、この時期のほとんどが風水に関連して村落移動がなされている。

浦添郡仲西村の記述【『球陽』巻15、1242】は、川の流れが集落に当るように流れているので、風水が善くないと書かれている。川の流れや、道路が当たる場所は、悪い気が流れているので、それが当たる場所は、風水よくない。それは風水の基

* 神奈川大学歴史民俗資料科学研究科教授

本的な解釈である。そのため人口が繁栄しないとされている。仲西村の場合は、風水解釈が先にあり、その後に、生活用水としての井戸が遠くて不便であるという地理的理由が示されている。しかし、移動先の場所は、首里・那覇に近くて交通が便利であること、井戸が近いという地理的理由が示され、その後に風水も善いと記されているが、その具体的理由は示されていない。繰り返すと、村落移動中期における記述の特徴は、そのほとんどが風水に言及されていることであり、この時期には王府の村落経営に、風水がさかんに用いられていたことがわかる。

さて、村落立地の風水は、そこに居住する人の幸不幸、健康と関連する。したがって、『球陽』の村落移動に関する記事には、「不幸踵を接す」とか「災難絶えず」あるいは「病身に堪えず」などという表現がある。その結果「人居栄えず」あるいは「人居減ず」という村落疲弊の状況となる。その状況を改善するために、近世の琉球では風水が用いられた。

その風水を判断するのは、風水専門家である風水師であった。風水師は、中国では民間の知識人であった。しかし、琉球では、蔡温のように優秀な久米村系士族の子弟を国費で中国の福州に留学させたりして、王府が官僚風水師を養成していた。18世紀後半以降における『球陽』の村落移動に関する記録には、それに関わった風水師の氏名が記載されるようになる。さらに、その記事の末尾には他の王府の役人と並んで風水師の印結が押されていることから、近世琉球の風水師は王府の役人であったことがわかる。

村落移動後期の19世紀以降は、風水判断の内容が詳しく記載されるようになるだけでなく、村民から風水判断を王府に願い出て風水師に要請する例も見られるようになる。村民が願い出て村落の風水判断をした資料として、近世末から明治初年の『真喜屋・稲嶺風水日記』がある。名護市の真喜屋・稲嶺の二村落を風水見分した風水師が細か

く記した風水記録である。

このように、近世琉球における村落移動は、琉球王府の改革や琉球の社会変化と連動して行なわれていた。つまり、17世紀後半の羽地朝秀の改革では、幕藩体制に組み込まれる中で重農政策に転換する時期に、田畑の開墾である仕明を奨励する政策において、王府主導の村落移動が始まった。それ以降、農村の疲弊を改善するために、より適切な耕作地を確保するという農村振興策として村落移動が継続して行なわれるが、それを判断する技術として風水が利用された。風水は、当時中国における先進の科学技術の一つとして考えられ、琉球王府はその技術を導入して農本主義による国家経営を行なっていたと考えられる。その風水知識は、国家の管理から次第に士族層そして農民層に浸透し、19世紀には農民自らが村落の状況を風水によって判断してもらうよう王府に要請するくらい、琉球社会では風水が普及していた。

付記：本発表の内容については、小熊誠「沖縄の村落移動と風水—村落史伝承と歴史的事実—」『歴史と民俗』27号、神奈川大学日本常民文化研究所（2011年）を参照頂きたい。

参考文献

- 球陽研究会『球陽 読み下し編』角川書店、1974年
都築晶子「近世沖縄における風水の受容とその展開」
窪徳忠編『沖縄の風水』平河出版社、1990年
仲松弥秀『神と村』伝統と現代社、1975年